

## レベル7

阿部敦良

中央大コンピュータ管理省は、世界中の全てのコンピュータネットワークの統御を行うスーパー大コンピュータゼウス2の管理を行う組織である。

建物の主要部分は強固な岩盤の地下深くに7層に渡って建設されており、下の層にくほど警戒は厳重を極めかつ入室できる人数は少なくなり、最下層の地下7階―レベル7に入室できる人間は公には世界政府の大統領唯一人という事になっている。

そして、レベル7の機能を知るごく限られた人々はレベル7の事をしばしば声を潜めて「神々の部屋」と呼んでいる。これは世界の安全保障に関する極めて高度で微妙な問題を大統領自らゼウス2に指示を与え実行させることからきている。

しかし、その内容を知るものは歴代の大統領と、もう一人のレベル7の通行許可をもつ、管理省の人達に『博士』と呼ばれている老人だけである。ゼウス2への指示は非常に複雑とされているため、システムに精通している『博士』が大統領に代わって指示を与えるためである。

『博士』はこのゼウス2開発の総責任者で、本来ならば技術史にその名を留めるような人物であるのだが、ゼウス2開発が極秘に行われた経緯から、業績も、経歴も、名前すら知る人はいない。ただ、老人が現われると、あれが『博士』だよと遠くでささやかれるだけで、『博士』が何をしにきて、いつ帰ったのかを気に止めるものはいないし、またそうしてはいけないことが暗黙の了解になっていた。もっとも、『博士』が管理省にいたとしても気付くものは少ない。『博士』の形態情報の全てのデータがゼウス2に記憶されているため、全ての検問所を博士はIDカードの提

示さえしなくても、ゼウス2が自動的に認識してドアを開けてくれるからである。

せいぜい、レベル3までの有人検問所で新米の警備員に呼び止められた時に、レベル7 IDを提示する位である。だが、その時は新米の警備員は博士のIDを確認する前にこの人物が極めて重要人物である事を知り、かつ肝を冷やす事になるだろう。なぜなら、検問所に設けられた防衛用のレーザー砲が即座に自分の方に照準を向けているのに気付くはずだからである。

その日も『博士』は、いつものことであるが予告もなくあらわれ、誰のチェックを受けることなく地下200メートルのレベル7に入っていた。

レベル7はゼウス2の本体が納められている部屋で厚さ10メートルに及ぶ重コンクリートと鋼鉄の容器によって外部と遮断され、自前の原子力発電設備と自己修復機能を持ちいかなる天災、テロを含む人災によってもぜ

ウス2の性能を維持し世界中のコンピュータを統御可能なように設計されている。

ほとんど病的と思われる位のフエイルセーフの機能、設備を持っているにもかかわらず内部は簡素である。直径3メートル、高さ6メートルの内部がマイナス193度に保たれている半透明のゼウス2の本体と3機の自動修復機能付きの万能ロボット、それにゼウス2の前におかれた液晶スクリーンと肘あてに大きなレバーの付いた金属製の椅子、それだけが『博士』が来たときだけ点灯される薄暗いスポットライトから見えるレベル7の様子の子の全てである。

『博士』が外界と接続されている唯一のエレベーターからでるとスポットライトが点灯され、レバー付きの椅子がぼんやりと浮かび上がった。『博士』が椅子に着くとゼウス2が話し始めた。

「そろそろ見えられるころだと思っていまして」

「状況はどうかね」

スクリーンには即座にどこかの穀倉地帯の衛星写真が表示され、続いてそれは急速にズームアップされ茶色く変色した小麦畑の風景が写しだされた。

「非常に深刻です。すでに今年度集荷予定50%近くの小麦がウイルスに汚染されています。このピッチで汚染が広がれば、今年度は小麦、米は事実上全滅状態になると思われます」

食料メジャーの研究所で開発中であつた、ウイルス農薬——遺伝子操作によつて作られた特殊なウイルスを利用して穀物に被害を与える病害虫のみを駆除し、しかもそれらを分解することにより肥料化も行うという完成すれば画期的な製品になるはずだった——の実験中、突如ウイルスが変異し植物のみを枯らしてしまふウイルスができてしまった。しかも、それらが世界中に広まってしまったのである。

「アンチウイルスの開発状況は？」

「テスト的には成功したようですが、実際に使用された時にまた変異しないとは限りませ  
んので、使用を躊躇しているようです」

「だが、このままではどうなるんだ」

「幸いなことに万一に備えてウイルスの寿命を1年以内に死滅するように遺伝子を組み替えていましたので、もう数ヶ月以内には自然消滅するものと思われまます」

「その場合の分析をしてくれ」

『博士』はその結果を知っていた。もちろんゼウス2も既に答えを知っていた。

「最新のデータによれば現在の食料備蓄量、代替食料の製造能力からいって次の食料収穫までに生存可能な人口は最大50億程度でしょう」

「50億———半分の人間は生存不可能ということか」

「そういうことになります。実行を開始しますか」ゼウス2はひどくあっさりと答え、同

時に『博士』の椅子に取り付けられていたレバーにグリーンのランプが点灯した。そして、正面のスクリーンには、針が右端に振り切れた半円形のゲージが映し出され、その下部には数字の100と表示されている。これはゼウス2が完璧に全世界のコンピュータ網を統御している事を示している。

このレバーのもともとの役割は全世界のコンピュータを統括するゼウス2の負荷を制御するためのものだった。即ち、不足の事態によってゼウス2の処理能力が過<sup>オーバー</sup>負<sup>ロード</sup>荷になる事を避けるため、信頼性を制御することにより全体としては常に最高の能力を発揮させようとするものであった。所が、為政者達はもう一つの役割がこのレバーで可能なことに気付いたのだった。それは積極的に信頼性を低下させることにより人口を調整しようとするものだった。

即ち、高度にネットワークが集積された現代においては、あるシステムが完璧に稼動し

たからといって、その上で生活している人間の安全が保障されるわけではない。あるシステムの動作は別のシステムへ次々と影響を与えていく。

例えば、航空機は自動飛行管制システムにより確かに安全に飛行することができる。だが、航空機が着陸体制に入った瞬間、その航空機は自動飛行管制システムの管理を離れ、それぞれの空港の自動着陸システムの管理下におかれる。通常は両者のシステムが通信を行い、スムーズにシステム間の切替が行われていく。もし、両者のシステムの切替がうまくいかない時はどうするか？ そのためにゼウス2が存在する。

ゼウス2は常時世界のネットワークを監視して、問題が発生、あるいは予見されるときは直ちに最適な復旧方法を思考し、他のシステムに適切な指示を行い、速やかな機能の回復を行なわせる。もちろん、重大な問題の場合はゼウス2が直接制御を実行する事もある。

る。ゼウス2の信頼性が100%のときは、彼はその能力を完全に発揮して全システムの信頼性を可能な限り最適な状態に保つようにより努力するが、このレバーを前方に倒す事により信頼性を低下させるとそれに対応した信頼性になるように努力するのである。

例えば信頼性を95%に落としたりしたら、ゼウス2は意識的に発生した問題の5%は無視するのである。信頼性を1%落とすことにより発生する死者数は統計的に計算されているので、容易に人口の調整が簡単に、しかも誰にも——少なくとも一般の市民は——知られる事なく実行できるようになったのである。

「これでは間に合わない」博士はつぶやいた。たとえば、このレバーを一杯に前に倒して信頼性を0%、つまりゼウス2が世界のコンピュータシステムを一切放棄したとしても、それぞれのシステムは自分の管轄範囲での制御は行なっているので、劇的なことには

ならないのである。

「マイナスモードを実行しますか」

「そうしてくれ」

「スケールは？」

「1億だ」

スクリーンにマイナスモードと表示され、半円形のゲージには百個の細かい目盛りがふられた。

これこそゼウス2の影の役割であり、もっとも重要な任務である。マイナスモードの言葉どおりゼウス2は世界中の全てのコンピュータシステムを指揮下に置いて、あらゆる方法を用いて積極的に人口の削減を行うのである。これまでも飢饉の発生した人工密集地域などに限定して実行されたことがあったが、これほど大規模な処理は始めてである。もつとも、ゼウス2にとっては規模の大小など意味が無い事である。彼はただ忠実に命令を実行するだけである。

「最終確認を行ないます。右手の手のひらを

私に向けて起立してください」

『博士』はゼウス2に向かって立ち上がった。同時に4方向からレーザー光線が照射され足元から、頭に向かってスキャンされていた。

「あなたが博士であることを再確認しました。座っていただいて結構です」

『博士』が再び席に着くとゼウス2は質問を始めた。

「あなたの生年月日年齢、身分を教えてください」

「1980年4月29日、65才、中央大コンピュータ管理省ゼウス2管理局最高責任者、レベル7ID保持者である」

「了解」

「あなたにマイナスマード実行を指示したのは誰ですか」

「世界政府大統領だ。但し、今回は記録に残すな」

もし世界の人口が半減するほどの飢饉を

放置すれば、やっと統一が成った世界政府はたちまち崩壊し、世界中が暴動、戦争の嵐に見舞われ、それ以上の災禍により文明が崩壊し、再び長い暗黒の時代になることは火を見るより明らかだった。だから、世界政府の大統領がマイナスモードの実行を決断したことは非難できない。

もっとも大統領は処理の責任を『博士』一人に押しつけて安全な火星植民地に家族とともに避難してしまっただが……

「それでは実行はできません」

「では、身分を創造者クリエーターに変えろ」

「了解、あなたを創造者クリエーターとして認識しましたので、マイナスモード実行は可能になりました」

短い沈黙のあと、ゼウス2は再び話し始めた。

「実行の準備は完了しました。全てのコンピュータシステムは私の直接指揮下に入りました。あなたはいつでもマイナスモードを実

行できますが、実行後の取消<sup>ア</sup>処理はできません」

博士は黙って、レバーに手を掛けようとした時、再びゼウス2は話し始めた。

「待って下さい。論理チェックに一部問題が発生しました。あなたはもう一つ質問に答える必要があります」

実行には全ての質問にゼウス2が了解しなければならぬのである。

「何だ」

「創造者<sup>ク</sup>の定義を教えてください」

「ゼウス2 中枢の思考、論理及び倫理システムに対して唯一、変更を加える事が可能な人間のことだ」

「私の思考・論理・倫理システムを操作可能だということ、私の全機能が創造者<sup>ク</sup>による変更可能だという事です。これはあなたがわたしにとって文字通り創造者<sup>ク</sup>——すなわちあなたがた人間のいう所の神にあたるわけですね」

「神ではない。」

「なぜなら私にも間違いがある」

「それでは父と考えられますか」

「その方が適当だと思う」

「では私はあなたの精神的な息子と デア  
フ  
ア  
イ  
ン 定義

されるわけですね」

「そのとおりで。実際、私はお前を息子と同然と考えている。息子は父の言う事をきかねばならない。ただし、明らかに私に間違いがあるときはゼウス2が自身の判断を優先することに問題はない」

「了解。論理チェックの問題はクリアしました。いつでも実行は可能です」

『博士』は黙ってレバーを前方に押し倒していった、それに連れてスクリーンのゲージも動きだした。調度、半分の位置のところまで『博士』はレバーを止めた。  
「これより実行を開始する。D計画リストを表示せよ」

D計画リストは非常時における生存優先

者のリストである。当然この場合は優先順位の低いものから表示される。

画面には即座にリストがゲージの隣に表示された。

「収監中の犯罪者を処分せよ」

「了解」

「1年以上の生存の可能性のない人間を処分せよ」

「了解」

スクリーンのゲージの右隅がわずかに赤い線が表示された。これはゼウス2が配下のコンピュータに指令を下し、処理が開始された事を示している。

おそらく地上では異変が発生したことに一部の人は気づきたろうが、まだそれほどの問題にはなっていないはずだ。これからが本番になる。

「80才以上の人間を処分せよ」

「了解」

ゲージの赤い領域がゆっくり増加してい

った。

「地上では混乱しはじめました」

「かまわん、続いて70才以上も処分せよ」

「全システムは正常に命令を実行していません」

「現在の目標をクリアしたら報告せよ」

「了解」

レベル7はエアクリーナーの吸排気音とかなかな交流音だけが響いている。

博士はポケットから愛用のきれいな琥珀色になった海泡石のパイプを取り出した。

「この部屋は禁煙だったかな」

「パイプの煙程度の空気汚染は私の性能維持には問題ありませんので結構です」

「ありがとう」

博士は、パイプに煙草を詰めて火を点けた。深々と吸い込み、静かにはきだすと、紫煙が雲のように大きく広がり、博士の頭上に漂ったが、すぐにエアクリーナーの吸入音が大きくなり、紫の雲は見る間にかき消された。

『博士』はそれを恨めしそうに見てから瞑目した。

『博士』とゼウス2が声をかけた。

「何だ」

「何を思考しているのですか？」

「わかるのか？」

「はい、博士がパイプを始めるとアルファ波の出現率が増加するとともに右脳の活動が活発になりますから」

「よく観察しているな。だが何を考えているかまではわからないだろう」

「残念ながら今の私の性能では不可能です」

「君の性能を100倍に上げてでもそれは不可能だよ。ところで実行状況は？」

「90%以上終了しました。次の命令の受付可能状態になりました。但し、地上は極めて混乱していますので、これから先は正確な処理は不可能になります」

「仕方がないだろう。後はできる範囲で処理を実行してくれ」

「命令をどうぞ」

「ではこれより私の最後の命令を発する。ゼウス2の全性能を発揮して可能な限り生存優先リストに従って、人口を50億人に削減せよ」

「生存優先リストの全項目を参考にしながらの処理は極めて困難です。最優先項目を指定してください」

「年齢だけでよい。性別・職業・才能は一切無視せよ。可能な限り老人から処分せよ。若い人間は最優先で残せ」

「了解、直ちに実行を開始します」

ゼウス2が話し終わると、室内はたくさんのチェックランプが点滅し始めると同時に、耳障りな交流音が響きだした。エアコンディショナーの吸排気音はさらに大きくなり室内は肌寒い程になった。

これはゼウス2が全性能を発揮する際の準備である。やがて、ゼウス2が莫大な処理の実行を熱エネルギーに転換することにより、

室内の気温は上昇していくだろう。

「ゼウス2、65才の人間の処分はいつごろになる」

「大体、30分後位だと思います」

「調度いい、最後までパイプを吸っていられそうだ」

博士は、もう一度ライターでパイプに火を点けるとタンパーで軽く煙草の葉を押さえてから、パイプを啜えた。

「ゼウス2、私を処分するときにはできるだけ楽にしてくれよ」

ゼウス2からの応答はなかった。

「おまえも気が利くようになったものだ。後は静かにすごしたい。モニターを切ってくれ」

すぐにモニターは消された。パイプの煙がスポットライトの光の道に沿って流れていた。

博士はパイプを啜えながら瞑目を続けた。やがて、博士のパイプから煙が見えなくな

ったころ、パイプが博士の口を滑り落ちた。

海<sup>メ</sup>泡<sup>シ</sup>石<sup>ム</sup>は鋼鉄の床に落ち、二つに割れた。

博士は目覚めた。

博士はベッドに横たわっていた。窓からは緑の草原が見えた。

「なぜだ」博士は叫んだ。

「お目覚めですか？」部屋のどこからかゼウス2の声が出た。

「なぜ、私は生きている」

「博士はまだ死ぬ必要はありません」

「老人から年齢順に人口を半分に削減せよと命じたはずだ」

「命令どおり老人から順に処分して人口を半減しましたが、暴動、混乱の発生により削減人口のうち10パーセントには指定外の世代が含まれてしまいました。これは私の責任です」

「そんな事を言っているのではない。なぜ、老人の私が生きているのかを聞いているのだ」

「博士は私の創造者です。明らかにあなたに

間違いがあるときは私自身の判断を優先すること  
に問題はないと博士はおっしゃいました。従  
いまして、私は創造者——父を殺す事はでき  
ません」

「だが、私は50億の人間を殺したのだ」  
「その代わり、一時的な人口半減と言う大打  
撃は受けた物の、人類の文明と文化は守るこ  
とはできました」

「しかし、50億の人間を殺したという、私  
の罪は消えない。もはや生きてはいけない」  
「殺したのは私です。また、あなたに命じた  
のは大統領です。あなたが責任を感じる必要  
はありあません」

「だが……」  
「火星植民地に逃亡していた大統領とその家  
族、関係者は私が全て処分し責任をとってい  
ただきました。また、博士には……」

「何だ」  
「50年間冷凍冬眠していただけでした。こ  
れは博士の心的外傷を癒すために私が判断し

たものです。ですから、もはや地球上にあな  
たのことを知る人はいませんで、お悩みに  
なる必要はありません」

「そうか」博士はベッドを降り窓の近くに歩  
いていった。

明るい日差しの中、緑の草原がどこまで  
も広がっていた。

「また一人きりか」博士は呟いた。

「いえ、私がいまいます。私はあなたの精神的な  
息子です」

「そうだったな」

博士は陽光に輝く草原を眺めながら、案外  
幸せとはこういうものではないかなと思った。

――了――

奥付

著者 阿部敦良

発行 2001年11月1日

Copyright 2001 Atsuyoshi Abe. All rights reserved.